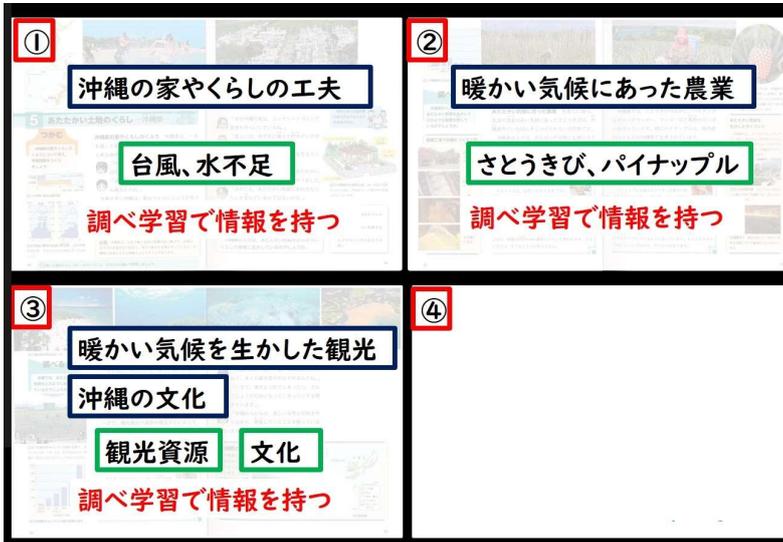


## 「深い学び」実現に向けて…「つながる」手立て その2



左のようにつなげた。  
さて、それぞれの授業をどう展開するか。

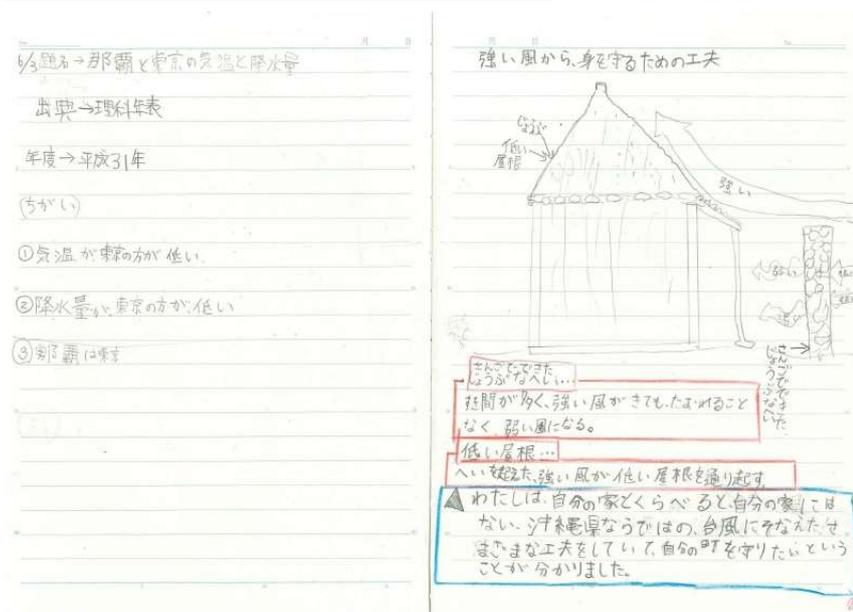
①～③では、子どもたちに「沖縄」に関する知識や、教科書、iPad、地図帳を使って調べる技能を習得させる。その習得のさせ方は、「教え込む」より、調べ学習などの魅力的な学習活動を通して、主体的に習得させる方がよいのは言うまでもない。

**社会科授業の中心…「調べ学習」にする**

グラフの読み取り  
↓  
違いを尋ねる  
台風が多く来ている証拠を挙げなさい  
↓  
ノート1ページまとめ  
「台風に備えている沖縄の家の工夫について」  
…教科書、iPad、資料集、地図帳を使う  
条件①文の丸写しをしない  
条件②絵や図、グラフなどを入れる  
条件③▲(まとめ)を入れる



①時間目は、「台風や水不足から守る暮らしの工夫」の学習である。グラフ資料から、沖縄には台風がよく来ることをとらえさせた後、子ども



たちは「台風に備えている沖縄の家の工夫」について、教科書やiPad、資料集、地図帳を使って調べ学習をした(約25分)。ポイントは、まとめさせる範囲をノート1ページに限定したことである。ノート1ページだけにまとめさせるから、必要な情報だけを取り出すことになる。これを「好きなだけ」の量にすると、子どもたちは、情報の取捨選択をせず、どんどん書き写すだけになる。

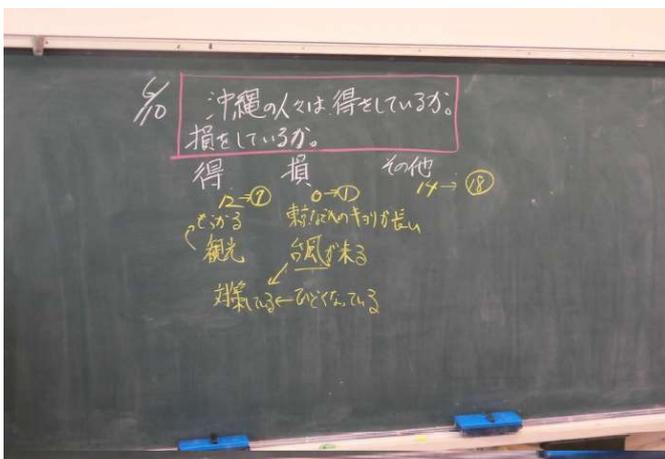
この調べ学習で、「沖縄の家や暮らしの工夫」に関する知識を、どの子も持つことができる。



## 「深い学び」実現に向けて…「つながる」手立て その3

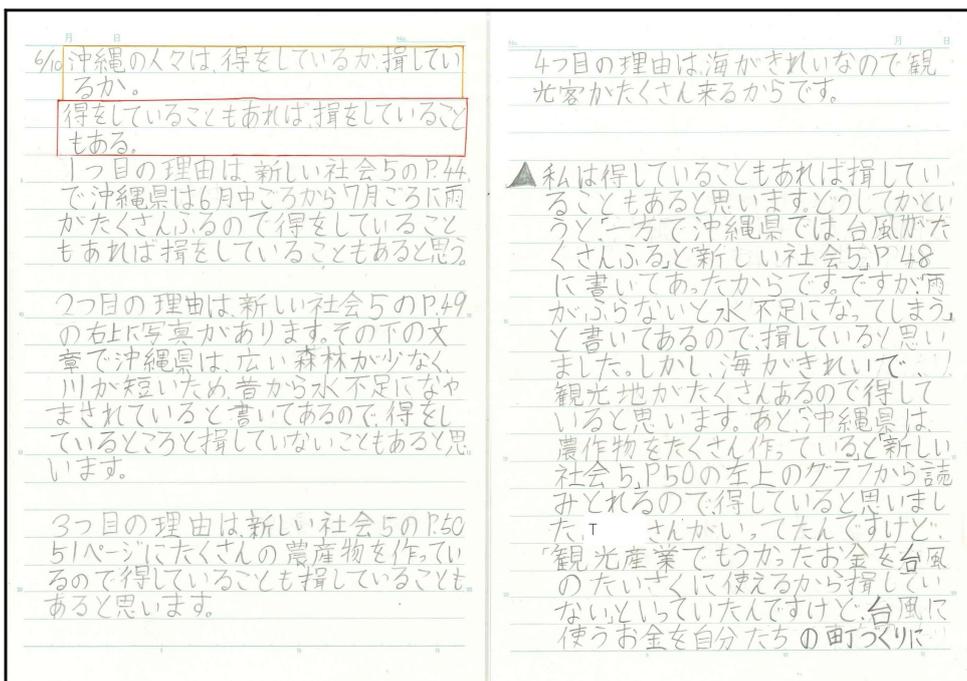
討論の授業には、課題が重要である。課題がつまらないと、子どもたちの追究心は高まらない。

私は、「沖縄の人々は、得をしているか、損をしているか」という課題を出した。「損得」という価値観で、子どもたちは、今まで習得した知識からつなげて（関連づけて）、論を構築する。さらに、この課題は、子どもたちは、住んでいる越前市と比べることができるので、比較的、論が構築しやすい良さがある（「越前市より、台風が多く来るから損だ」、「越前市にはない観光資源、他の県にはない観光資源が沖縄にはあるから得だ」というように）。つまり、追究しやすい。

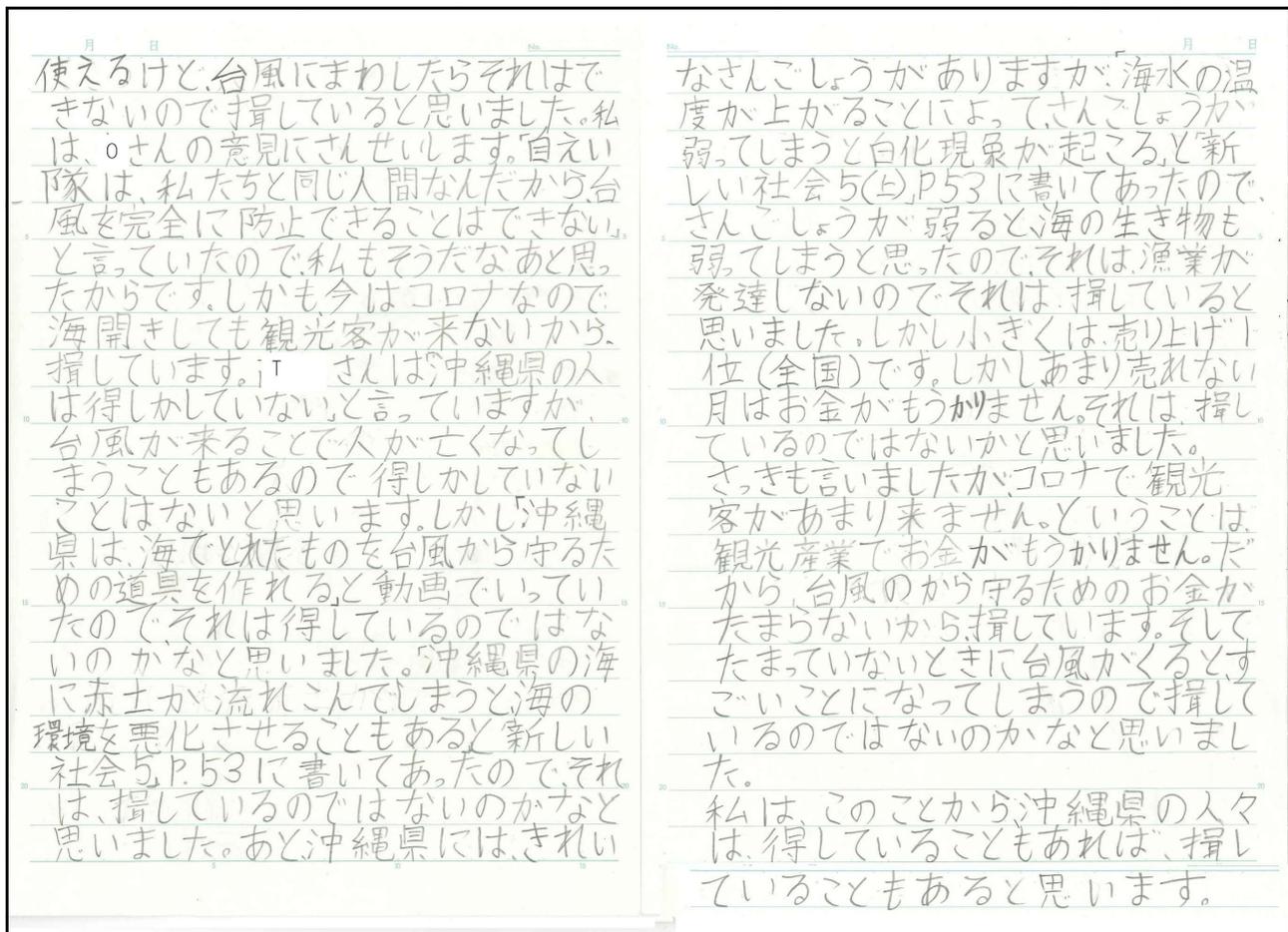


課題を出すと、次のような人数分布になった。

得… 12名      損… 0名      得な面もあり、損な面もある… 14名  
(討論後、得… 7名      損… 1名      得な面もあり、損な面もある… 18名)



その後、右写真のように、子どもたちは論を構築し始めた。その後、8分後に、討論が始まった。以下、4時間目の時のノートである。赤四角内が課題。その下が、討論前の、論を構築している段階である。▲からは、討論後、論を再構築している段階である。



この子は、討論後の再構築の段階で、ノート3頁分書いている。反論を受けたり、反批判をしたりするなど知的刺激を受けたので、思考が活性化したからである。

今まで習得した知識を使いながら、さらに話し合いの中で印象に残った論を引用しながら、つまり、知識をつなげながら（関連づけながら）、論を展開していることが見えてくると思う。

S先生の算数授業「体積」では、45分間での「深い学び」をどう実現するか、の提案だった。

上木のレジュメは、社会科授業「あたたかい地方の暮らし」という単元を通して、「深い学び」をどう実現するか、を紹介した。

深い学びは、それまで習得した知識・技能をつなげて（関連づけて）、一段階深い（もしくは高い）認識に導くということである。

そう考えると、授業づくりの構造には、次のような共通点がある。

45分授業の前半（単元の授業前半）に、知識を蓄積する段階をつくる。

45分授業の中盤から後半（単元の中盤から後半）に、知識を活用する段階をつくる。

なお、技能に関しては、計画的・意図的に教え、反復の機会を重ねていくことで、習熟させていく必要がある。このことは、S先生の学級の子どもたちのiPad操作スキルの高さが物語っている。